



東日本大震災からの復興

# 「スクラムかみへい住宅」 7年の記録



2018年11月

慶應義塾大学 先導研究センター 特任教授  
日本プロジェクト産業協議会 森林再生事業化委員会特別顧問 米田雅子

NPO 法人建築技術支援協会 理事 片岡泰子

慶應義塾大学大学院 理工学研究科 伊香賀研究室

## はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災で被災された方々の住宅再建のために、同年11月1日に、釜石市、大槌町、遠野市の林業、製材業、設計事務所、工務店など木造住宅に関わる事業者が集まり、「上閉伊地域林業・木材・住宅振興協議会」（2012年2月に「上閉伊地域復興住宅協議会」に変更）を結成した。2市1町は昭和の初期まで上閉伊郡に属していたため、上閉伊地域という名称を使い活動を開始した。

「地元の山材を活かし、地元の職人の手で、地元の皆さんの役に立つ」をモットーに、スクラムを組んで復興住宅に取り組んできた。住宅の名前は「スクラムかみへい住宅」、有名な釜石市のラグビーにちなんだ名である。住宅プランは基本形を6タイプ揃え、2間X2間を基本に、壁間仕切りを自由に配置できる自由設計として、地域の山林の木材を使い、手頃な価格を目指した。2013年4月の第1号の上棟式以降、2018年9月末までに45棟が完成し、11棟が設計・施工中である。

震災直後の被災三県においては地域型復興住宅づくりが推奨され、2011年9月に設立された岩手県復興住宅推進協議会には、本協議会を含む135の生産グループが登録した。それから約7年が過ぎた今、地域ぐるみで本格的に住宅建設を継続しているのは、山田型復興住宅と本協議会ぐらいである。本書では、地域型住宅の実現と活動の継続にとって何が重要であったかを探りたい。また、数少なく残ったグループとして、今後の展開についても考えたい。

なお本書は、慶應義塾大学理工学部伊香賀研究室・先導研究センターとNPO法人建築技術支援協会、JAPIC 森林再生事業化委員会が本協議会を支援してきた立場から、7年間の活動と事業をまとめたものである。執筆にあたり、上閉伊地域復興住宅協議会の皆様、スクラムかみへい住宅の施主、関係機関の皆様にご協力いただいた。この場を借りて深謝する。

本書は5章で構成している。1章は東北太平洋沖地震の災害実態と復興計画について、2章は上閉伊地域復興住宅協議会の立ち上げに至る経緯とモデルプランについて述べる。3章はスクラムかみへい住宅の建設進行状況と周辺環境を説明する。4章は上閉伊地域の復興状況について、慶應義塾大学が行ってきた毎年の定点観測調査も含めて述べる。第5章は「スクラムかみへい住宅の取り組みから学ぶ」として、これまでの課題と今後の方向について考察する。第6章は資料編で、住宅のパンフレット、協議会の名簿、スクラムかみへい住宅に関する論文等を掲載する。

本報告書は、未曾有の大震災から立ち上がって、2市1町の地域連携、オール上閉伊の力で、沿岸地域の復興のために、地域型住宅を作り続けてきた団体の記録である。すべての構成員のたゆまぬ努力と共助の精神に心からの敬意を表して上梓する。

2018年11月 執筆者を代表して 米田雅子

東日本大震災からの復興  
「スクラムかみへい住宅」7年間の記録

目 次

はじめに

<b>1. 東北太平洋沖地震の災害実態と復興計画</b>	5
1. 1 東日本大震災と上閉伊地域の被害状況	5
1. 2 復興計画の概要	7
1. 3 住宅再建に関する被災者の意向	9
1. 4 津波被害を受けた上閉伊地域の復興計画	12
<b>2. 上閉伊地域復興住宅協議会の立ち上げと活動</b>	23
2. 1 協議会の立ち上げの背景と経緯	23
2. 2 協議会の体制づくりと活動準備	26
2. 3 「スクラムかみへい住宅」のベーシックプランづくり	32
2. 4 目標実現に向けた事業の推進	44
2. 5 7年間の協議会の建設取組	49
<b>3. スクラムかみへい住宅の建設状況</b>	73
3. 1 スクラムかみへい住宅の建設進行状況	73
3. 2 入居者に聞いた自力再建への道のり	85
3. 3 協議会登録工務店の対応・努力	93
3. 4 自力再建とともに見えてきた課題	97
<b>4. 上閉伊地域の復興状況と今後の計画</b>	103
4. 1 毎年の定点観察報告	103
4. 2 釜石市、大槌町の今後の復興住宅計画概要	115
<b>5. スクラムかみへい住宅の取組から学ぶ</b>	119
5. 1 スクラムかみへい住宅の特徴	119
5. 2 今後の上閉伊地域復興住宅協議会への期待	122
5. 3 おわりに	124